

バードリサーチ ニュース 創刊号

Vol.1 No.1



2004. 9. 6.

Photo by Uchida Hiroshi

特定非営利活動法人(NPO法人)認証取得!

バードリサーチが8月31日にNPO法人として認証されました。これから法人としての活動が始まります。現在は日本野鳥の会WINGの一室を間借りしていますが、10月1日からはWINGから程近い東京都日野市の高幡不動駅近くに事務所を借りてスタートする予定です。スタートのタイミングとしてはこの上ないことに、現在の会員数はちょうど100名。皆さまのご支援をありがたく感じています。

登記、役所や税務署などとのやりとりなど、しばらくは慣れない仕事で手間取ってしまうと思いますが、しっかりとした体制を作り、来年の繁殖期までには、会員のみなさまの協力を得ながら、全国的な鳥類の分布や生態などの基礎情報の収集ができるようにしたいと思っています。よろしくお願いたします。

バードリサーチ 一同

設立記念パーティーを開催します!

下記の通り、設立記念パーティーを開催いたします。奮ってご参加ください。

- 日 程： 2004年10月16日(土) 夕方
場 所： 高幡不動駅周辺 (場所未定)
アクセス： 新宿駅より、京王線八王子行、または高尾山口行 特急(準特急) 30分
お申込み： お申し込みはメールにて受け付けます。参加をされる方はタイトルを「設立記念パーティー参加希望」として、本文にお名前をご記入の上、下記アドレスまでお送りください。
E-mail: info@bird-research.jp
締め切り： 2004年10月6日(水)

活動計画

ミヤマガラスの渡来状況調査 <予報> 鳥獣関係統計は疑って読め!

高木 憲太郎

近年、関東でもミヤマガラスの観察される地域が拡大してきています。しかし、全国的な分布状況の変化について調べるような調査は今のところ行われていません。そこで、この秋にアンケート調査を実施することにしました。詳しくは次号に掲載しますので、埋もれているフィールドノートを掘り起こしてお待ちいただくと助かります。

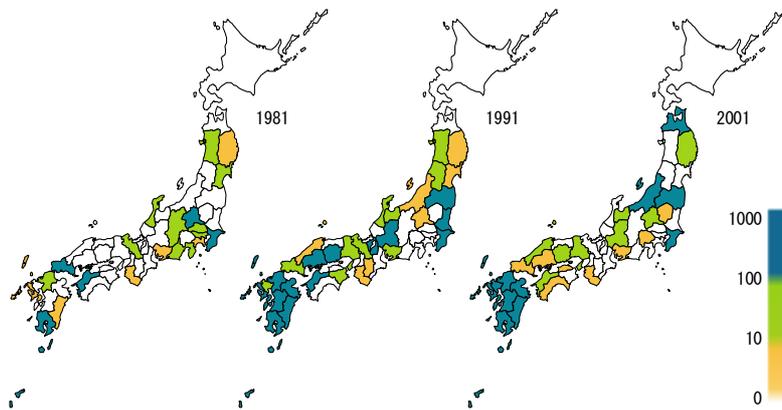


図. 各都道府県の狩猟者によるミヤマガラスの捕獲数の変化(鳥獣関係統計より)。白は0羽、黄は1~9羽、緑は10~99羽、青は100羽以上。



ミヤマガラス & コクマルガラス
[Photo by 谷 英雄]

とりあえず、環境省自然環境局が発行している鳥獣関係統計を紐解いてみました。1981年度に千葉県で334羽群馬県で955羽が狩猟されているなど誤認と思われる記録があり、また狩猟者の動向など社会的側面も反映されているようです。

眉に唾をつけながら見なければいけないデータではありますが、20年前と比較すると分布が拡大し個体数が増加している傾向は読み取ることができそうです。特に、九州における捕獲数の増加や、北関東と中国地方における分布の拡大が、1981年と1991年の間で顕著に見られました。

さて、アンケート調査からはどんなことがわかってくるでしょうか? ご協力をお願いします。

【連絡先】高木憲太郎 (takagi@bird-research.jp)

最新鳥学情報

－なぜイギリスで 森林の鳥が減っているのか？－

British Trust for Ornithology. 2004. Why are woodland birds declining? BTO News (253): 5-7.

BTOの夏号のニュースレターに森林の鳥が減少した原因について解析した報告が掲載されていました。その原因としては、越冬地や中継地の破壊、気候変動や食物となる昆虫等の減少、森林の分断化、森林管理の衰退、捕食や種間競争(特に樹洞営巣性のもの)など、日本の森林性鳥類の減少の理由としてあげられていることと同じことが多かったのですが、「シカによる植生の変化」というのがあげられていたのが新鮮でした。

イギリスでは、シカが増えている、シカの採食により下層植生がなくなってしまう森林が増えているそうです。そのため、下層植生で採食するナイチンゲールやヨーロッパカヤクグリ、キタヤナギムシクイといった鳥類が減少しているということです。



キタヤナギムシクイ
[Photo by 谷英雄]

日本でも、シカが高密度で生息する奈良県大台ヶ原ではシカの採食によって下層植生がなくなったり低くなったり

して、ウグイス、コルリ、コマドリ、センダイムシクイなどが減っていて、逆に開けた場所に生息するアカハラやビンズイ、さらにはシカにより樹木が枯死することにより、枯死木で採食するキツツキ類などが増えているという研究が森林総合研究所の日野さんにより行なわれています(日野 2000, 2004)。その論文は、興味深く読んだのですが、奈良や日光、一部の島などシカの多い特定の地域の特殊事情で、日本の鳥類相にシカが大きな影響を与えているとは考えていませんでした。先日、知床の福田佳弘さんに指摘されて気づいたのですが、特に、エゾシカが広範囲で増加している北海道では、イギリスと同様にエゾシカのために個体数が減ってしまっているような鳥がいるのかもしれないですね。何か情報をお持ちの方がいらっしゃいましたらお教えてください。



【植田睦之】 知床半島のエゾシカとエゾシカの採食で草丈の低くなった草地
[Photo by 福田佳弘]

引用文献

- 日野輝明. 2000. ニホンジカが高密度に生息する森林の植生構造と鳥類群集. 日本鳥学会誌 48: 197-204.
- 日野輝明. 2004. シカが鳥のすみかを左右する. 森の野鳥を楽しむ101のヒント. pp. 164-165. 日本林業技術協会, 東京.

海外の調査情報



Big Bug Count (RSPB) 「飛翔性昆虫調査」

今年7月、イギリスの鳥類保護団体RSPBが「Big Bug Count」という飛翔性の昆虫の数をしらべる調査をはじめました。

日本でも同様な傾向があるのではないかと、ぼくも調べたいと思っていたのですが、イギリスでは飛翔性の昆虫が減ってそれが鳥の減少につながっているのではないかと考えられており、その基礎データを集めるために、この調査が企画されました。

調査方法は、まず、自動車のナンバープレートをきれいに拭きます。そして自動車で任意のコースを走り(スピードが速いほうが望ましい)、ナンバープレートにブチャッとつぶれて張りついて死んでいる虫の数をかぞえ、相対的な虫の密度を把握しようというものです。

試みに、ぼくも、東京から富士山に行くあいだにどれくらいの虫がぶつかるか、調べてみたのですが、窓ガラスにぶつかりそうになる虫はいましたが、ナンバープレートには一匹の虫もぶつかっていませんでした。

日本くらいの虫の密度だと、この調査方法で調べるのはきついかもしれません。網戸に集まってくる虫の数調査とか、何かよい調査方法を考えて、来年、日本でも同様な調

査をやってみたいと考えています。何か良いアイデアなどあれば、教えてください。
【植田睦之】

Big Bug Countのホームページ:

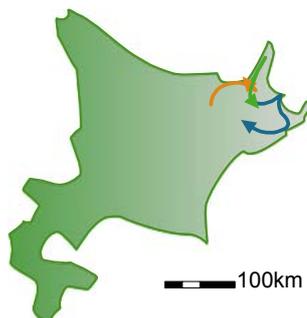
<http://www.rspb.org.uk/bugcount/index.asp>

Big Bug Count 道東でのテストラン

日本生態学会に参加する前に、道東を観光して周ったところ、ナンバープレートに60匹の虫がぶつかっていました。

2004年8月22日10:00に女満別空港を出発し、網走を経由して斜里岳へ。翌日は知床半島を1往復して霧の摩周湖。24日は野付半島から風蓮湖まで南下して厚岸を経由、釧路湿原の塘路湖に17:50着というルートをとどり、走行距離は579.3kmでした。北海道であれば、RSPBの行なっているBig Bug Countの方法でも調査することが可能かもしれません。

【高木憲太郎】



走行ルートと、60匹の虫が衝突したナンバープレート

学会情報

第51回日本生態学会大会 参加報告

第51回日本生態学会大会が8月25日(水)～29日(日)に釧路市観光国際交流センター(ラムサール記念センター)で開かれました。研究対象は、菌、植物、昆虫、魚、哺乳類、鳥類と幅広く、テーマも多岐にわたり生理、物質循環、繁殖・生活史、景観、行動・社会、個体群、群集、動植物相互作用、保全など。バードリサーチからの発表はしませんでした。面白い発表がいくつかありましたので、その一部をご紹介します。

● 草原性の鳥 減少と保全

シマアオジ激減！草原性鳥類のモニタリングと鳥相変化 ○玉田克巳, 富沢昌章, 梅木賢俊, 高田雅之

シマアオジは主に北海道の草原に夏鳥として渡来し繁殖しますが、近年激減しているという発表がありました。1974～85年に行われたラインセンサスと同様の調査を2002、2003年に行い比較したところ、78%のルートでシマアオジが観察されなかったということです。牧草地の草刈が以前よりも早い時期に行われるようになったことなどが原因として指摘されているようですが、今回の調査でシマアオジが消滅した春国岱や釧路湿原のルートの周辺には牧草地が存在していないので、減少の原因は今のところ不明だそうです。一方で、ウグイスやセンダイムシクイなどは増加しており、湿原の乾燥化によるササの侵入やハンノキ・ヤナギ林の発達が見られていました。

異なったヨシ原の管理手法が鳥類の繁殖に与える影響 ○永田尚志

利根川河川敷や霞ヶ浦で繁殖するオオセッカとヨシ原の野焼きの関係についての発表がありました。実験的にヨシ刈りを行った区画を造成し、対象区との比較を行ったところ、無脊椎動物の現存量は増加したが、スゲ等の下層植生が減少し、営巣場所がなくなるという変化が起こるために、オオセッカは1年目に激減する。このように、全域での野焼きは鳥類に悪影響を与える。しかし、ヨシ刈りした区画でも周辺に生息環境が残されている場合は、2年目に個体数が回復するので、ヨシ原を3つ以上の区画に分け(海外では5つが望ましいとされているそうです)1年に1区画だけ野焼きするという管理が望ましいだろう、というお話でした。

● 目から鱗？ 統計のはなし

データ解析で出会う統計的問題 — 多重検定と多重比較 — 粕谷英一, 久保拓弥

<http://hosho.ees.hokudai.ac.jp/~kubo/ce/2004/>

このほか鳥以外の発表からも多くの収穫が得られた有意義な学会でした。研究をまとめる上で避けて通れない道、それが統計です。多重比較などは、どういう場合に補正をしなければいけないのか？補正すると検出力が落ちて有意差が消えてしまう。など、皆さんも悩まれたことがあるのではないのでしょうか？

どうやら、難しい検定をしなくても済む統計的手法にモデル選択というものがあるそうです。例えば、BとCには違いがないが、Aはそれらよりも大きいということを示したい時に、取り得る組み合わせ(この場合6個)をモデルとして仮定し、その中でもっともデータに適合したモデルが $A \neq B = C$ であれば、意図したことが客観的に示されたとなる。ということのようです。目の覚めるような話でしたが、同時にキツネにつままれたような感覚に陥りました。モデル選択はいつでもどこでも使えるという訳ではないようですから、研究計画や目的、データなどから、ユーザーがちゃんと勉強して使用しなければいけません。しかし、使えるようになれば大きな武器になる・・・かも？(いまだ半信半疑(^_^)) 【高木憲太郎】

講演要旨などの情報は以下のホームページから入手することができます。

<http://jes.ees.hokudai.ac.jp/>



ポスター会場の風景。あまりの人の多さに室温も上昇気味。参加者は大会プログラムなどを団扇代りに、熱い議論を闘わせていました。

2004年度鳥学会大会 発表案内

2004年度鳥学会大会が9月17日(金)～20日(月)に奈良女子大学で開かれます。バードリサーチからは以下の発表を行ないます。

● 口頭・ポスター発表

東京のヒバリの急激な減少とその原因

植田陸之・松野葉月・黒沢令子

関東地方のカワウの分布と個体数の変化

加藤ななえ・高木憲太郎・成末雅恵・福井和二

衛星追跡によるカワウの行動圏調査

高木憲太郎・加藤ななえ・福田道雄・茂田良光・田辺仁・中澤圭一

飼育下のエトピリカの子はいつ巣立つか？

濱外晴美・福田道雄

● 自由集会

カワウを通して野生生物と人との共存を考える(その7) カラーリングによる標識と参加型調査について考える

企画者: 高木憲太郎・石田朗・須川恒・福田道雄

それぞれの発表の講演要旨をホームページにアップしましたので、ご覧ください。

http://www.bird-research.jp/1_ronbun/index.html

また、学会に参加されたい方は、以下のホームページより情報を入手することができます。

<http://gi.ics.nara-wu.ac.jp/OSJ04/>

活動報告

関東カワウモニタリング2004年7月
調査結果報告

加藤 ななえ

準備号 No.1 でお知らせしました「関東カワウモニタリング2004年7月」の調査結果が集まりましたので、速報をお届けいたします。のべ84名の調査員の皆さまにご協力いただき、合計59ヶ所のねぐらを調査しました。

今回カウントされた**個体数は**、関東全域で15,951羽でした。これはほぼ昨年並みです。カワウによる漁業被害の訴えの増加とともに、カワウの個体数が爆発的に増えているように思われがち

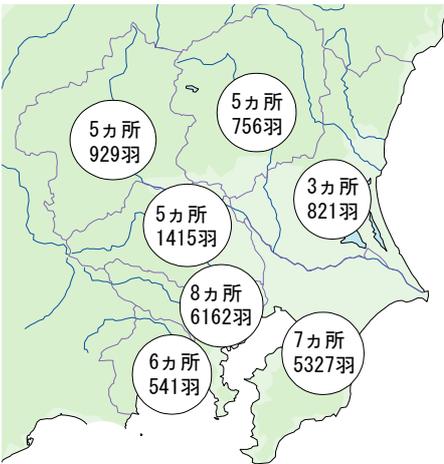


図1 2004年7月 関東のカワウのねぐら箇所数と個体数(都県別)

図1を見ると、千葉県や東京都で特に個体数が多くなっていますが、昨年と比較して増加した訳ではありません。夏期には多くのカワウが東京湾に採食に集まり、沿岸部のねぐらを利用する個体が増えるのです。

図2は過去9年間のねぐら個体数の平均を、海岸線から10キロメートル以内のねぐらを沿岸部ねぐら(橙色)、それ以外を内陸部ねぐら(緑色)として分類し、7月と12月の個体数の違いを表わしています(加藤ほか2003より)。夏は、カワウにとって採食しやすい魚が内湾の比較的浅い沿岸部に多くなると推測されています。一方冬は、水温の低下とともに魚が深みへ移動する(三浦1971)ため、魚を捕まえることが難しくなるのだらうと考えられています。

例えば、ねぐらへの帰還方向の調査結果から東京湾葛西沖を主に採食場所としていると考えられる荒川河口にあるねぐらでは、冬はおよそ700羽、春は200羽がカウントされていますが、今年の夏には約3000羽のカワウがねぐら入りしていることがわかりました。

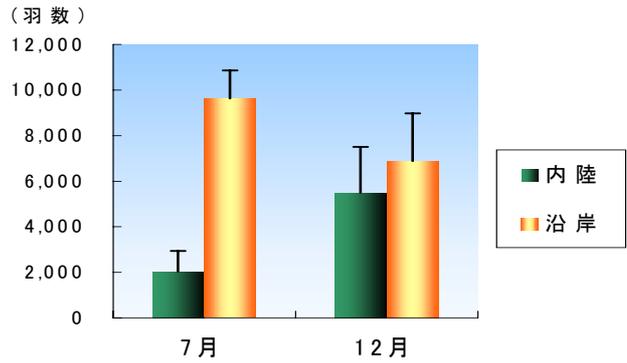


図2 関東地方の沿岸・内陸別カワウのねぐら個体数の季節別の比較(1994年~2002年の7月と12月の平均)

営巣数は、全体で295巣。7月は繁殖期の後期にあたり昨年まではもっと少なかったのですが、営巣時期が長引いてきているようにも思われます。食物資源によるものか、または繁殖場所の環境によるものかわかりませんが、この傾向が続くようだと原因の調査が必要になります。

安定しつつある個体数とは異なり**ねぐらの箇所数は**、近年増加し続ける傾向にありました。2003年12月にカウントした56ヶ所をピークに2004年3月と今回は連続して減少しています。

今回、特に大きく減少したのは神奈川県でした。ねぐらにしていた人工物の撤去や工事などの影響でねぐらが放棄されていることが調査からわかりました。その他、被害防除対策の効果が現れたのかもしれませんが、コイヘルペスの影響でコイ・フナの放流が行われなかったことが影響した可能性も考えられます。また、新しく作られたねぐらを見つけれられていない可能性もあります。

引用文献

三浦泰蔵. 1971. 琵琶湖の魚類. 琵琶湖国定公園学術調査団(編) 琵琶湖国定公園 学術調査報告書 : 313-330. 滋賀県, 大津.
加藤ななえ・高木憲太郎・成末雅恵・福井和二・田中啓太. 関東地方のカワウの季節移動—ねぐら調査より—. 日本鳥学会2003年度大会講演要旨集: pp. 113.

新しいねぐらを発見された方は、下記まで情報をお寄せください。また、次回12月の調査へのご協力も宜しくお願いいたします。

【連絡先】 加藤ななえ (kato@bird-research.jp)